

〔研究ノート〕

ジェイムズ・マクファーソンの
『古詩断片集』 覚書

片 山 麻美子

キーワード：ジェイムズ・マクファーソン、『古詩断片集』、『オシアン作品集』、トマス・グレイ、ケルト趣味、

ジェイムズ・マクファーソン (James Macpherson) は1760年に『古詩断片集』(*Fragments of Ancient Poetry*) を出版した。これは1765年の『オシアン作品集』(*The Works of Ossian*) に先立つ古詩集で、15編 (第2版では16編) という小冊子でありながら、多くの点で『オシアン作品集』を視野に入れた先行出版の重要な役割を担っていた。とりわけ『古詩断片集』では、オシアン (Oscian)¹⁾ が詠んだとする断片を収録していること、これらからさらに長大な叙事詩を復元できる可能性のあること、そのために調査旅行の支援 (予約購読を含む) を求めていることなどが「序文」で特筆されている。その後マクファーソンは1761年に、豪華本『オシアン作品集』の第1冊『フィンガル』(*Fingal*) を、また1763年には第2冊『テモラ』(*Temora*) を相次いで出版する。そして1765年にふたつを合冊した普及版『オシアン作品集』を出版した。これらの『オシアン作品集』は『古詩断片集』に対する熱狂的な評判と支援の結果、調査旅行が行われ、ハイランド地方のオシアンによる叙事詩として喧伝され出版されている。この点において、『古詩断片集』の当初の目的は十分に達成されたといえよう。

本稿では『古詩断片集』が出版された経緯と、この詩集が『オシアン作品集』へと発展していった背景と特質について考察していきたい。マクファーソンがこの小冊子を出版するまでに、彼を支援し、ゲール語の詩を翻訳するよう奨励したエディンバラの知識人たち、特に劇作家ヒューム (John Home) と序文を書いたブレア (Hugh Blair) との関係をみていく。そこにはハイランドのマクファーソンに対して、ローランドの文人たち自身のスコットランドへの想いも重なって見えてくる。以下では、ギヤスキル (Howard Gaskill) 編集『オシアン詩と関連する作品集』に収録されている『古詩断片集』と『オシアン作品集』のそれぞれのテキストを典拠とし、スタッフォード (Fiona Stafford) の序論 (“introduction”) を参照して、『古詩断片集』を出版するに至った基本的な事実といくつかの重要な視点を

1) オシアンのつづりは『古詩断片集』では Oscian、『フィンガル』以降はすべて Ossian となっている。つづりのゆらぎはマクファーソンの創作的翻訳が、特に『古詩断片集』の段階で未完成であったことを示していると考えられる。

まとめておきたい²⁾。18世紀前半に起こったジャコバイト軍の壊滅的な敗北のなか、ハイランドでマクファーソンがどのように育っていたか。青年となってローランドの知識人たちと出会い、どのような経緯でゲール語の詩を翻訳し、『オシアン作品集』の構想を持つに至ったか。それによって『古詩断片集』から『オシアン作品集』に至るマクファーソンの創作活動の文化的・政治的文脈の一端を明らかにしたい。なお、本論の最後に、ブレアが匿名で載せた「序文」の日本語訳を付けた。

目 次

1. マクファーソンの生い立ちと18世紀ハイランドの文化・社会状況
2. アバディーン大学で学んだ古代ギリシア・ローマ研究と古代文化の再評価
3. ゲール語の詩の翻訳……エディンバラの劇作家ジョン・ヒュームとの出会い
4. 『古詩断片集』の出版……ブレアの「序文」とスコットランドの叙事詩への期待
付記 『古詩断片集』につけたブレアの「序文」の日本語訳

1 マクファーソンの生い立ちと18世紀ハイランドの文化・社会状況

マクファーソンはジャコバイト軍が起こした戦乱とイングランドが彼らに加えた厳しい弾圧のなかで少年時代を過ごしている。1688年の名誉革命以降、フランスへ亡命したジェイムズ2世とその子孫は王位継承権を主張し、イングランドのハノーヴァー王朝に対峙しスコットランドで繰り返し蜂起した。なかでも1715年と1745年のジャコバイトの乱は、ハイランドに壊滅的な破壊をもたらした。マクファーソンはこの二つの戦乱に挟まれた1736年に誕生している。彼はハイランドのバデノック (Badenoch) というゲール語を話す地域で生まれたが、ここには1715年の蜂起以来ハイランドを平定するための、連合王国軍が建造した威圧的な城壁 (Ruthven Barracks) があり、ウェイド將軍の命令で建築した道路と橋の交通網の要所になっていた。マクファーソンは幼少のころから、彼の親戚家族を監視する兵士を見て育ってきたのである。

1745年、マクファーソンの叔父で族長クリュニー (Ewan Macpherson of Cluny) はジャコバイト軍に合流し、カロードン (Cullodan) の戦いで生き残るが、政府軍がハイランドへ進軍してきたので潜伏する。この蜂起で、クリュニーとマクファーソン一族は城も村も破壊された。1746年夏には王位継承を主張していたチャールズ (Charles Edward Stuart) 自身がクリュニーとその他の支援者とともにマクファーソンの故郷バデノックに潜伏した。その後、9月にチャールズはフランスへ逃亡したが、クリュニーは政府軍が反乱の首謀者を探すなか、逃亡者として9年間領地に残ることになる。(Stafford, viii) マクファーソン

2) 本稿におけるマクファーソンの作品はすべて James Macpherson, *The Poems of Ossian and Related Works*, ed. Howard Gaskill with an Introduction by Fiona Stafford, Edinburgh University Press, Edinburgh, 1996 に拠る。またテキストに関してはギヤスキルのテキストと稿注、および、作品と伝記的解説はスタッフフォードの序論を参考にして本文中にページ数を示した。

の一族がジャコバイトの乱で重要な役割を持ち、叔父の族長クリュニーとその一族はジャコバイトの乱が平定されてからも厳しい監視と弾圧のなかで息をひそめて暮らしていたことが理解できる。マクファーソンは10歳から18歳という多感な年代に、コミュニティと家庭が抑圧され死と隣り合わせる戦禍の中で生きてきたといえよう。

そしてこのとき、ハイランドの伝統的な暮らし方も破壊された。1746年以降タータンの肩掛けが禁止され、武器の携行やバグパイプの演奏も禁じられた。領地は王に没収され、古くからの統治権や司法権が廃止された。それ以前既にハイランドでは交通網の解放やゲール語でなく英語を使用するように奨励されていた。マクファーソンがゲール語の英雄詩を保存しようとした背景には、上記のようなハイランドにおける文化破壊の状況が全般に進行しており、ジャコバイトの反乱のあとこうむった故郷の文化的な打撃を修復する必要性が生じていたといえる。これらはウェールズで進行していた伝統文化の衰退と同じく、連合王国全体にわたる統合政策の下での、実質的には文化のイングランド化 (Anglicization) と期を一にしている³⁾。マクファーソンの古詩収集の行為は、18世紀イギリスにおける統合政策のもとで失われるつつあるハイランド固有の文化を保存しようとする民族意識に支えられていたのである。

2 アバディーン大学で学んだ古代ギリシア・ローマ研究と古代文化の再評価

マクファーソンは子供のころから伝説や民話などハイランドの伝統的な文化を吸収して育った。スタッフォードによれば当時フィオン、オスカー、オイシン (オシアン) など、北西スコットランドとアイルランドに共通するゲール語の伝説や民話はインヴァネスシャーのあらゆるところで実際に語り継がれていた。(Stafford, ix) マクファーソンも語り部のハイランドの民話を聞いて育ち、周囲の自然にケルトの英雄の名前が付けられていた環境で育っている⁴⁾。こうした幼少のころの伝統的な文化と伝承が抑圧され衰退していたことはすでに述べたが、マクファーソンはアバディーンの大学に進むことで、古い伝統の価値を再認識することになる。

マクファーソンに影響を与えたのは二人の古典・古代研究者であった。(Stafford, x-xi) 一人目のブラックウェル (Thomas Blackwell) は、ギリシアの詩人ホーマーを研究し、ホーマーが政情不安のなかで創造的な精神を育て、古代ギリシアの柔軟で想像力豊かなことばで叙事詩を完成させたと評価した。またマクファーソンの指導教官であったダンカン

3) ハイランドの社会と文化状況については Stafford, "introduction", および同著者による *The Sublime Savage, James Macpherson and the Pomes of Ossian*, Edinburgh University Press, Edinburgh, 1988, pp. 6-23 を参照。またウェールズの言語と詩歌の衰退については, Prys Morgan, "From a Death to a View: The Hunt for the Welsh Past in the Romantic Period," in *The Invention of Tradition*, ed. Eric Hobsbawm and Terence Ranger, Cambridge University Press, Cambridge, 1983 (日本語訳 エリック・ホブズボウム, テレンス・レンジャー編, 『創られた伝統』前川啓治他訳, 紀伊国屋書店, 1992年) を参照。

4) スタッフォードは隣人で有名な語り手の Finlay Macpherson of Lyneberack からそうした物語を冬の夜長に聞いて育ったのではないかと推測している (Stafford, ix)。

(William Duncan)は、初期段階の古代社会が持つ自由と活力に注目した。ゲルマン民族をローマの脅威的存在として、彼らの強靱な肉体と精神、また厳しい生活スタイルの美質を称賛して、贅沢の風潮を憂う当時のスコットランドの知識人に古代の再評価を訴えた。

マクファーソンにとって大学で学ぶ古代ギリシアの再評価は、故郷のハイランドの伝統的な社会と文化に共通する特質を再認識させた。民間に語り継がれる神話、口承される韻文の伝統、バードの果たす役割は無論、その他にブラックウェルは暴力も叙事詩の要素と考えている。大学で論じられる“primitive”「原始性」は創造性と関連する美德と考えられた。大学の経験はマクファーソンにとって自らの文化へのまなざしを変える契機となった。古典研究者が失われた社会を注意深く再構築する姿はマクファーソンに何世紀も破壊されずに続いた故郷の文化の価値を教えてくれたのである。以後マクファーソンは育ってきたハイランドの文化を弁護するだけでなく、真剣に学問的に扱う価値があると捉え、ゲール語の詩と物語の保存に取り組んでいく。

3 ゲール語の詩の翻訳……エディンバラの劇作家ジョン・ヒュームとの出会い

マクファーソンの故郷ハイランドが荒廃し伝統が抑圧され廃れていく一方で、ローランドには、ハイランドの口承詩に強い関心を示す知識人たちが存在した。この項では、『古詩断片集』が出版されるに至った直接の契機である、マクファーソンとエディンバラの劇作家ヒュームとの出会いについて述べたい。マクファーソンがハイランド地方に口承で伝えられてきた古詩を叙事詩的な英雄譚としてゲール語から英語へと翻訳するに至った経緯を検討する。

さて、ゲール語による詩歌の収集は16世紀からすでに始まっていた。早くには1512年にリズモアの首席司祭 (the Dean of Lismore) であるマクレガー兄弟 (James and Duncan MacGregor) がさまざまなゲール語の詩を収集しており、18世紀に入っても幾人かがゲール語の詩を口述筆記したり雑誌に発表したりしていた⁵⁾。(Stafford, xi) このようにゲール語の詩に関心が寄せられていた時期にマクファーソンはエディンバラの劇作家ヒュームに1759年出会ったのである。

ヒュームは1750年にロンドンから帰郷した時以来、スコットランドの民話に関心を抱いていた。彼の友人のコリンズ (William Collins) は18世紀にいち早くスコットランドのパラッドに着目しオード (“Ode on the Popular Superstitions of the Highlands of Scotland”) を執筆した詩人であるが、この作品を献呈した相手がヒュームであった。新しい詩歌の靈感を望んでいたヒュームは、劇『ダグラス』(Douglas) を執筆したときに国境の伝説を彼の筋書きに引用していた。そこで古典を研究したゲール語の物語を収集しているハイランド出身の若いマクファーソンに興味を示し、北部スコットランドの伝統的な詩歌に近づ

5) 他にも1750年代までに、口承詩を記録しようとする要求が強まり、Donald Mack Nicol (Lismore の長老派牧師), Jerome Stone (Dunkeld の教師) が手稿を作成し、Archbald Fletcher も Argyllshire の詩を口述した。特にストーンは独創性を求める当時の文学論に応じて Bas Fhraoch の翻訳を1756年 *The Scot's Magazine* で発表し、さらに多くのゲール語の詩を発表する予定であった。

こうしたのである。ヒュームが一遍の詩を翻訳するよう頼むと、マクファーソンは最初大変嫌がったが、最終的に協力して、「オスカーの死」“The Death of Oscur”を執筆した。この作品は数か月後『古詩断片集』の作品Ⅶに古詩の一つとして発表されている⁶⁾。

ヒュームは単にマクファーソンにゲール語の詩を翻訳させただけでなく、それらをエディンバラの文人や、さらにはイングランドのグレイやウォルポールなどの詩人たちに回覧し、マクファーソンへの注目を広めた点でも重要であった。彼のパトロンはのちに首相を務めることになるスコットランド出身のビュート伯 (Earl of Bute)⁷⁾ であり、マクファーソンが『オシアン作品集』を出版する際の献呈を行った人物である。ヒュームを通して、マクファーソンの人脈は広がり、彼らローランドの文人や政治家の支援を受けて、『古詩断片集』の小冊子から『オシアン作品集』の豪華本へと出版は順調に進展していった。

さて『古詩断片集』が出版されるまでのスピードはヒュームと彼の知人たちが最初の翻訳を読んだ時の興奮を示している。マクファーソンに出会ったのは1759年の10月であったが、数日後、ヒュームはエディンバラの文人たち (literati) に彼を紹介している。そのなかにはのちに『古詩断片集』の序文や『オシアン詩』の批評論文を書いてマクファーソンを支援するブレアも含まれていた。マクファーソンのわずか15編の小冊子は翌年の1760年6月に初版が出版され、8月には、英雄詩、特に古代スコットランドの失われた叙事詩を求めて、調査旅行がハイランドと北西の島嶼地域で実施された。そしてその年の10月には第2版が1編を加えた16編の断片詩集として出版されたのだった。わずか1年の間に、無名のハイランドの若者は小さくはあるが『古詩断片集』を重ねて出版し、古詩調査旅行も実施したことになる。

『古詩断片集』は出版後、すぐに雑誌の注意を惹く。1760年7月号の『スコッツ・マガジン』(The Scots Magazine) や『ジェントルマンズ・マガジン』(The Gentleman's Magazine) では抜粋を印刷すると同時に、新しい発見を激賞する書評を載せた。初版は15編がのるだけの小さい冊子ながら、亡くなった戦士を嘆き、韻律豊かな散文、単純な言い回し、印象的な自然のイメージが従来の詩歌と異なる新しい特徴を持つ作品として注目された。こうして一族がジャコバイトの反乱で敗北し、政治的文化的な抑圧のなかで荒廃したハイランドに育った若い青年は、1760年にはそのハイランドで失われつつあった口承詩の伝統を英語に翻訳することで衆目を集める文学者となっていった。そこにはスコットランドのローランド地方、特にエディンバラの文人たちが古詩に寄せた強い関心と復元への大きな支援が存在していたのである。

6) 1759年ヒュームにゲール語の古詩の翻訳として手渡した「オスカーの死」は1761年出版の第1冊『フィンガル』の作品「テモラ」で脚注に移され、最終的に1763年の『オシアン作品集』では削除されてしまう。Gaskill, note 25, p. 415. マクファーソンの翻訳における独創的な試みを内包する重要な作品である。詳しくは Stafford, *The Sublime Savage*, pp. 77-95 を参照。

7) Stafford, *The Sublime Savage*, p. 134. ビュート伯は1762年から63年にかけてジョージ3世の時代に首相を務めたトーリー派の政治家である。

4 『古詩断片集』の出版……ブレアの「序文」とスコットランドの叙事詩への期待

出版後に大きな注目を集めた『古詩断片集』では単に民衆の歌う素朴なゲール語の詩歌というだけではなく、オシアン⁸⁾の叙事詩が発見されるという壮大な文学的ロマンを提示していたことが重要な要素であった。叙事詩の可能性はスコットランドのローランドだけでなく、グレイやウォルポールなどイングランドの文壇の興奮を喚び起こした。古代ギリシアのホーマーに匹敵する古詩がイギリスに存在すること、オシアンというバードが詠った英雄詩（叙事詩）の可能性は、当時文化や政治に影響力を持っていたイギリス全土の知識人たちを狂喜させたのである。そしてその可能性と調査への支援を明快に呼びかけたのは匿名の人物が寄稿した「序文」であった。『古詩断片集』には翻訳者であるマクファーソンの名前も、序文を書いたブレアの名もどちらも示されず、ただ、古代の詩人、特にオシアンをはじめとする詩人たちによる詩の断片であることが示されていただけであった。この「序文」を実際に書いたブレアはその後『オシアン詩』の叙事詩としての信ぴょう性を支える論者の役割を担うことになる。

『古詩断片集』の「序文」でブレアは、ハイランドに今回の断片詩よりさらに数多くの、英雄詩と呼ぶにふさわしい長さの貴重な遺稿が見つかるかもしれないと述べ、調査に対する支援を求めていた。（第5段落）特に最後の3編は、アイルランドの王がデンマークの王に攻められ苦境に陥っているところを、スコットランドの「荒涼たる山」（the desert of hills）と呼ばれるフィンガルが援護し、その結果デンマーク王は敗退するという物語の断片であると述べて注意を喚起している。これらの断片詩は作品 XIII から XV（第2版では作品 XIV から XVI）にあたるが⁸⁾、のちの『オシアン作品集』の原型となる重要な作品といえる。まさにこれらの断片詩は国が成り立つごく早い時期の古代、民族の友情と戦いが描かれた歴史の歌として、文人たちの注目を集めた詩編であった。

スコットランドの叙事詩という考えはエディンバラの知識人に魅力的であった。叙事詩とは当時の文学で最高位の格をもつジャンルで、存在そのものがその地域の高い文化のレベルを示すものであった。ハイランド地方に生き延びた長老たちは失われた古詩を彼らの記憶から復唱できる、そこで、翻訳者が出かけて行って、適切な朗唱を記録し、韻文の手稿を集めれば、スコットランドの叙事詩を忘却から救うことができるかもしれない。スコットランドの興隆をめざす国民主義的な考えがブレアやファーガソン（Adam Ferguson）、もうひとりのヒューム（David Hume）やエリバンク卿（Lord Elphinstone）の関心を高めた。ローランドの文人たちは、スコットランドに際立つ文学遺産がないだけでなく、1756年の英仏戦争の勃発以来、スコットランドに市民軍（militia）がないことも懸念していた。（Stafford, xiii）盲目のバードであるオシアンはスコットランドのホーマーと位置づけられるだけでなく、この詩人が詠った偉大な叙事詩は、フィンガルと彼の英雄たちの軍隊が侵略者と果敢に戦い彼らを撃退したと伝える。ローランドの文人たちにとってオシア

8) 特に作品 XIII は原作の翻訳に近いとされている。Stafford, *The Sublime Savage*, p. 85.

ンの叙事詩は時宜にかなった古代の発見で国民意識を高める好機であった。同時に断片ということが数十年前のジャコバイトからの脅威をやわらげ拡散させるようだった。かつて連合王国軍を恐れさせたハイランドの氏族の力は1760年には充分破壊されていた。ハイランドは詩歌の復活のためにローランドに予約購入の助けを求めなくてはならない状況にあり、ローランドの文人たちは新しく統合されたスコットランドの神話の創造のために購入しているのだと考えたからである。マクファーソンの『古詩断片集』は、ハイランドとローランドを結び付け、スコットランドという国の過去を創造する試みでもあったといえる。

最後に『古詩断片集』から『オシアン作品集』の出版へ

『オシアン作品集』を考えるうえで、『古詩断片集』の出版は二つの点で重要である。一つにはハイランドのマクファーソンとローランドのヒュームやブレアたちとの出会いである。消滅の危機にある伝統の復活をはかるマクファーソンと叙事詩の発見によってスコットランドの国民意識を高めようとするエディンバラの文人たちとの協同によって『古詩断片集』は出版に至った。スコットランドをひとつにまとめる文化的政治的要因が双方に存在していた。第二の重要点は『古詩断片集』がマクファーソンの英語翻訳の上での独自の創作、創意工夫と伝統的なバラッドからの逸脱を示しており、『オシアン作品集』の原点となっていることによる。ブレアは『古詩断片集』の序文の第4段落で、「翻訳は非常に逐語的である。」（“The translation is extremely literal.”）と述べている。このことばが結果的にマクファーソンとブレアを『オシアン作品集』の真偽論争に巻き込むこととなった。しかしながら、マクファーソンのバラッドの伝統に縛られない独創的な英語訳は、むしろ翻案というべきで、その特徴は既にヒュームに紹介した最初の断片詩「オスカーの死」に表れている⁹⁾。『古詩断片集』に見られる翻案の詩的な特質がスコットランドだけでなく、イングランドも含めて、ゲール語の古詩への関心を高めたといえよう。

『古詩断片集』の初版が出版されて数か月後の1760年8月にマクファーソンは北西部に出発し、スコットランドの古代叙事詩の復活のために口承詩の聞き取りと手稿の収集に乗り出している。ハイランドからスカイ島、ヘブリデース諸島を回りながら、多くの人々の支援を受け調査は行われた。直接朗唱を聞いたり、地域の老人の語り部の物語を記録したり、手稿を受け取るなどして、数週間後にマクファーソンはカバンにいっぱいの詩歌と物語を収集していた。そして、親戚と友人の助けのもとで、依頼された叙事詩の復元の仕事に取り掛かった。1761年の2度目の調査旅行とともに、収集と編集の結果は、

Fingal; An Ancient Epic Poem in Six Books. Together with several Other Poems composed by Ossian the Son of Fingal, 1761.

Temora: An Ancient Epic Poem in Eight Books. Together with several Other Poems composed by Ossian the Son of Fingal, 1763.

の2冊に結実する。こうして『古詩断片集』の小さな冊子からはじまったマクファーソン

9) Stafford, *The Sublime Savage*, pp. 84-85 参照。

のゲール語の古詩集は、スコットランドとアイルランド、デンマークをめぐる壮大な古代叙事詩『オシアン作品集』へと発展し、イギリスだけでなく、ヨーロッパ各国で翻訳され国際的な名声を得ていくのである。

付記

以下はブレアが執筆し、『古詩断片集』につけた「序文」の翻訳である。

ひとびとは以下の断片詩を古代スコットランドの詩歌の真正なる遺作と考え信頼してよい。それらの制作年代を正確に確定することは不可能である。これらが書かれた地域では、言い伝えによりこれらの詩歌を最も遠い古代の時期のものとしなしている。そして作品の精神と文体そのものがこのことを証明している。作品は社会の最も初期段階に属する思考に富み、またそうした風習を描いている。原作の語法もまた、非常に古いもので、数百年前に同じ言語で書かれた詩歌の文体とは大きく異なっている。それらはスコットランドの北部の氏族社会が確立する以前に書かれたものである。氏族社会そのものも非常に古い。というのも、もし氏族がその時代に形成され存在を知られていたのであれば、高地地方のある詩人 (a Highland Bard) が書いた作品のなかでかなり異彩を放っていたはずだからだ。しかし、これらの詩歌には氏族のことは少しも述べられていない。キリスト教の宗教や信仰について全く言及がないことも注目し値する。確かに、いかなる種類の宗教の痕跡もほとんど見当たらない。ある事実が、スコットランドにおけるキリスト教の揺籃期と同じ時代に作品が書かれたことを示しているように思える。翻訳者が目にした¹⁰⁾、同じ作品群の断片詩の一つに、ひとりのカルデ¹¹⁾または修道僧が、本書のいくつかの断片詩で主要な人物となっているオシアンの口から語られる、彼とその血族の戦闘での功績を筆記するよう望んだと書かれている。しかしオシアンは修道僧と彼の宗教を蔑み、このような偉大な男たちの行為はとても気高いテーマであるから、彼や同じ宗教の誰にも筆記することは不可能だ、と語る。これはキリスト教がまだこの国で確立されていなかったことを証明している。

今回出版された作品はこの選集では別々の作品のように見えるが、それらのほとんどが本来フィンガルの戦いに関連した、より大きな作品の挿話であると信じるだけの根拠がある。この英雄に関しては無数の言い伝えがスコットランドの高地地方で今日まで残っている。彼の息子である、オシアンの物語は一般に非常によく知られているため、偉大な一族が絶える最後の人物を描くうえで、物語は「最後の英雄オシアン」という格言にもなって

10) マクファーソンはここに以下のような注を付している。「訳者は実際にそうした作品を目にした。たとえば、16世紀前半の重要な選集であるリズモア司祭の本のなかに存在する。この本の保存はマクファーソンが行っている。」

11) Culdee は8-12世紀のアイルランドまたはスコットランドの僧侶。キリストとその使徒にならって13人を単位として隠遁生活を送った。この伝統はケルト教会がローマ教会の支配下に入った時に終了した。Oxford Dictionary of English 2e, Oxford University Press, 2003 を参照。

いる。

これらの作品群がバードたちによって書かれたことは疑いない。バードはアイルランドとスコットランド北部で長年にわたって引き継がれた、誰もが知る集団のひとつである。バードすなわち詩人を、族長あるいはひとかどの人物なら誰でも一家に一人抱えており、その仕事は韻文で、一族の素晴らしい戦いの数々を記録することにあつた。連綿と続くバードたちによって、これらの詩歌が子孫から子孫へと受け継がれてきた。あるものは手稿で、しかしそれ以上に口承によってである。そして外国人との接触が非常に少ない国で、また自らの祖先の記憶に非常に強く愛着を持っている人々の間で、伝承が作品の多くを今日まで改変することなく素晴らしい韻律の状態で維持保存してきたのである。

作品は音楽に歌詞をつけたものでも、実際に歌われたものでもない。原作の作詩法は単純であり、本来の言語を理解できるひとにとっては非常になめらかで美しい。押韻はほとんど使われない。しかし、抑揚（カデンツァ）や、一文の長さは意味に合わせて、変化に富んでいる。翻訳は非常に逐語的である。原作の語句の順序でさえも模倣されている。この語順のために、他では選ばれなかったような、いくつかの倒置法が文体に使われることになった。

これらの断片詩の詩歌としての素晴らしさについてここでは語らない。一般の読者に判断を任せ、そして意見を述べてもらおう。注意深く調査すれば、これらの作品が収集されたと同じ地域で、今回発表された作品に劣らず価値のある、古代の天才の遺稿がさらに多く見つかるのではないかと信じられている。特に、もしこの計画が支援を受ければ、かなり長編の、英雄詩の文体にふさわしい作品が、復元され現代訳にされる可能性を期待できる根拠がある。主題はロシュリンの王スウォーザンによるアイルランド侵攻である。これはエルス語でデンマークを表す。クチュレイドはアイルランドの氏族の大將または族長であるが、侵略の報せを得るやすぐ、軍を集め、軍議を開き、戦った。しかし、数回にわたる戦いは成功せず、アイルランド軍は屈服せざるを得なかった。ついに、この作品で「荒涼たる山」¹²⁾と呼ばれるスコットランドの王フィンガルが、船を従え、クチュレイドの支援に到着した。彼はデーン人を国から追い払い、勝利の凱旋をして故郷へと戻った。この作品は保存されている作品のなかで最も古いものと考えられている。また作者はフィンガルの遠征に自らも同行したと語っている。今回の作品集の最後の三篇はこの叙事詩の断片として翻訳者が入手したものである。そして、非常に不完全ではあるが、それらを載せることは価値があると判断した。もし全体が復元されれば、スコットランドとアイルランドの古代史に大きな光を投げかけることになるであろう。

12) 『古詩断片集』作品 XIV を参照せよ。